



訃報

高橋 重敏初代技術課長ご逝去

大正7年12月10日生まれ。昭和19年から名古屋帝国大学物理学科に機械工作室技官として勤める。電子回折および電子顕微鏡の実験装置の設計・製作を通じて、多くの研究者、技術者の研究に寄与した。昭和56年吉川英治文化賞受賞。福岡県出身。

篠原 久典（名古屋大学 大学院理学研究科 教授 名古屋大学 高等研究院 院長）

1979年4月、分子研装置開発室で高橋重敏さんに初めてお会いした。背筋が伸び、見るからに一本筋が通った人であることは直ぐに分った。私は大学院博士課程を中退して西信之研究室の助手になったばかり。学生時代の研究室では装置は自作が当たり前だったので、私にとって分子研で最初の超高真空チャンバー『影武者』を装置開発の岡田君、鈴木君とピカピカ（水谷）君に協力をしてもらって製作を始めた。私も好きな金属工作のため旋盤やフライスを使い始めようとしたが、直ぐに待ったが掛った。

研究者が装置開発室の旋盤などを使うためには、高橋さんの機械実習を受け免許皆伝が必要だった。各種バイトの入った工具箱を持って、高橋さんに弟子入りした。実習は、バイトの研ぎ方、そして何よりも旋盤の手入れ、掃除から始まった。そう、野球で言えば、まずはグローブやスパイクの手入れだ。「篠原さんは、センスがないなあ」と叱咤を受けながらも必死に工作実習をこなした。『高橋イズム』を注入して頂いたお陰で、その後、旋盤、フライス、ボール盤などの手入れと掃除には自信があった。

時が流れ、1994年4月、私は名大理学部装置開発室の運営委員長になった。高橋さんが分子研に栄転される1975年まで室長をされていた室だ。高橋さんとのご縁を感じた。当時の理学部装置開発室には、増田さん、石川さん、鈴木さん、鳥居さんらがいられた。皆、高橋さんの直弟子。名大と分子研の装置開発の人事交流も、この頃、私が始めた。高橋さんが、名大理学部教授の上田良二先生と育んだ「装置開発では技術者は研究者と対等に議論をして第一級の装置を製作する」高橋イズムは、時と空間を超えて分子研装置開発室に引き継がれた。

高橋重敏さんのご冥福を心よりお祈り致します。

鈴木 光一（分子科学研究所 技術課 課長）

高橋さんは、電子回折と超微粒子研究で先駆的な業績のある故上田良二先生（1911-1997名古屋大学名誉教授）と共に長い間仕事をされ上田先生の研究に貢献されました。その後上田研究室から新たに設置した名古屋大学の理学部工作室をまかされ分子研に赴任される直前まで技術者育成を含めた工作室運営をされていました。高橋さんは分子研が創設された1975年に当時国内で最初の教室系技官組織として設置された技術課の初代課長として着任され1980年3月までの5年の間、技術課長として分子研の技官を率いてこられました。

高橋さんが分子研に着任した研究所創設の頃は愛知教育大学の旧図書館の建物に、井口洋夫先生、広田栄治先生、吉原経太郎先生の3研究グループが仮住まいの状況で、工作室も設備がほとんど整っていませんでした。そんな時期に私は技官として採用され、高橋さんと毎日工作技術や構造設計の勉強などマンツーマンで過ごす日々でした。当時土曜日は半ドンといって午前中が勤務で午後からは休みでしたが、高橋さんは昼食もそこそこに「よし、名大に行くから」と言って私と2人でほぼ毎週出かけて行きました。目的は、名大の工作室の先輩技官の方々から講義を受ける「真空」の勉強会です。先輩方というのは勿論高橋さんの精神を受け継いだ技術者の方々です。教科書は上田良二先生が執筆された岩波全書の「真空技術」を使っていました。この本は私が分子研の採用面接に来た日の帰りがけに、どこか駅の書店で探して購入して読みなさいと、採否も決まっていなかったのに購入した（させられた）図書です。この本は今でも手元にあります。

後に名大から分子研に異動となった岡田則夫氏（現JAXA）が着任するまで、孫ほどの年の差がありましたが、当時の装置開発室には高橋さんと私だけの2人きりでしたので、熱心な指導が思い出されます。生活指導とまではいいませんが、寝ているときでも閃いたアイデアを忘れない様に私は枕元にノートと鉛筆をおいている、それくらいしなさいと常におっしゃっていました。今風でいうならブラックに近いでしょうか。

こういった時代を共に過ごしてきた高橋さんを「じいさま」と慕う同僚や諸先輩方と、昨年（2016年）の師走に忘年会で集った際に、高橋さんにまつわる記録をまとめようと話し合い、存命のあいだにインタビューすることにしていました。年が明けたら高橋さんを訪問することになっていた矢先に訃報が届きました。本当に残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。